

# 造形教育におけるデカルコマニーの意義

隅 敦・鼓 みどり・上山 輝・若山 育代・  
米崎 瑛美<sup>\*1</sup>・江田 希<sup>\*2</sup>・萩原 至道<sup>\*3</sup>

## The Meaning of Decalcomania in Art Education

Atsushi.SUMI, Midori.TSUZUMI, Akira.KAMIYAMA, Ikuyo.WAKAYAMA  
Emi.YONEZAKI, Nozomi.EDA, Norimichi.HAGIWARA

E-mail: sumi@edu.u-toyama.ac.jp

### 要 約

本稿は、平成24年度から継続して行っている富山大学人間発達科学部と附属学校園の共同研究プロジェクト「幼小中のつながりを意識しながら、造形教育で身につける力について研究する」の成果をまとめたものである。まず、表現技法としてのデカルコマニーを、美術史的文脈に位置づけた。次に、日本の美術教育史的観点から、その技法について触れた先行研究や実践書および教科書の内容を整理した。そして、デカルコマニーを用いた幼稚園から高等学校（高等専門学校）までの実践事例を紹介して、造形教育におけるこの技法の可能性を確認した。さらに、描画行為におけるデカルコマニー技法の取組の変化について校種ごとに分析した結果をまとめた。

研究の成果として、デカルコマニーを造形教育で取り上げる意義を確認できたとともに、単に見たままを描く力を問われる絵画指導では得ることのできない表現の広がり期待することができた。また、幼児から高校生に至るまで、この技法を用いることで表現すること自体に自信を抱かせることが可能であり、1960年代にすでに指摘されていたこの技法の持つ教育的意義を再確認することができた。

### Abstract

This paper is a result of a collaborated project of attached schools and the faculty of Human Development of the University of Toyama "Skills acquired through art education with links of kindergarten, elementary school and junior high school" from 2012.

Firstly we review decalcomania technique in art historical context. Secondly we look at decalcomania practice in previous researches, technique manuals and textbooks in Japanese art education. Thirdly we describe our decalcomania practice in kindergarten, elementary, junior high and high school (Specialized vocation high school) so as to present the universal value of this technique in art education. Finally we analyze type of painting action of decalcomania at different degree to see the change through development stages.

As a result decalcomania is valuable for art education since it may provide broad expression than realistic sketching practice. And it makes children and students confident of their art expression. This reconfirms its educational value that was pointed out in 1960's.

**キーワード：**デカルコマニー、モダンテクニック、表現、図画工作科、美術科、学習指導要領、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、教員養成、現職教育

**keywords：**decalcomania, Modern techniques, Expression, Art and Handicraft Subject, Art Subject, Course of Study, Kindergarten, Elementary school, Junior high school, High school, University, Teacher Training, In-service Training

## 1. はじめに

本学の附属幼稚園、小学校、中学校、大学と校種間の造形教育における連携を念頭において編成され

た共同研究プロジェクトの造形グループは、可能な限り月1度集まり、共通の視点を持ちながら意見交換を行ってきた。そこでは、各校種に共通してデカルコマニーを用いての実践を行い、幼児・児童・生徒の多様な反応をビデオで撮影して詳細な分析を行うことで、明らかにしようとしてきた。

デカルコマニーとは、絵画の技法の一つであり、

\*1 富山大学人間発達科学部附属幼稚園

\*2 富山大学人間発達科学部附属小学校

\*3 富山大学人間発達科学部附属中学校

一般的には、紙に絵の具を塗り二つ折りにしたり、もう一枚別の紙を重ねたりして、偶然にできる不定形の形を表現に生かすことができるものである。

本稿では、そのデカルコマニーを用いた実践の分析に加えて、美術史及び美術教育史におけるこの技法の位置の確認、各種技法書や教科書における取り上げ方等について、調査を行った結果も加えて、改めてデカルコマニーという技法の意義を問い直す作業を行い、この技法を実施することの意義についてまとめた。

## 2 デカルコマニーの美術史的背景

美術表現は描画技術、観察力、構想力、情感が相補って発揮される。対象を観察し、視覚的效果を考えながら描出するためには、当然手を動かす訓練が求められた。また自然美を理解し、それを到達目標として、研鑽が重ねられた。自然は人類にとって普遍的な美の規範であり、自然を再現する営みがさまざまな時代や地域で積み重ねられてきた。

東洋美術では山水（風景）を最も重視し、自然の景観を繊細緻密に描出すると同時に、水墨によるモノクロームで時には自由闊達に描く事例も多い。唐時代に墨を直接紙面に垂らし、墨の濃淡に従い手足や頭髮で墨をこすりつけて作画するパフォーマンス的な潑墨の手法があったと文献に記載されている<sup>1</sup>。これは偶然によって生み出される効果が作品を決定するので、画家は自らの意志の関与しない表現を行ったと言えるだろう。室町時代に雪舟が明留学の締めくくりに描いた『破墨山水図』（1495年、東京国立博物館）は、ほとぼしするような淡い墨痕が樹木や霞がかかった岩をあらわし、破墨（淡墨を重ねた濃淡で描く手法）ないしは潑墨の一端を見ることができる<sup>2</sup>。

また、日本近世美術に多大な影響を与えた「文人画」は中国士大夫階層のたしなみであり、職人的な技巧はむしろふさわしくないと退けた。しかしながら、日本では、文人画を導入した柳沢棋園は知識人であったが、池大雅や与謝蕪村などの技能の高い専門画家が担った<sup>3</sup>。また偶発性を生かす手法としては、濡れた紙に濃い絵の具を置いてにじませる琳派のたらし込みがある<sup>4</sup>。平安時代にさかのぼる料紙装飾には墨流し（マブリング）や吹き流しも見られ、偶発性の効果を巧みに用いた制作が広く行われ

ていたことが知られている<sup>5</sup>。

偶発的形象を取り入れた表現は、西洋美術史にも散見される。『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』の「風景」で、ボッティチェッリの言葉として、多色の絵の具をしみこませたスポンジを壁に投げつけて出来た色斑に描こうと思った形象が見いだせるので、風景を丹念に研究する必要はないと記している<sup>6</sup>。ダ・ヴィンチ自身は風景の丹念な研究の必然性を説くが、偶発性を介入させる手法を紹介している。また壁面のしみを熟視するうちに、多様な風景や場面を見いだすとも述べている<sup>7</sup>。ここで興味深いのは、無作為に作られた形象に意味を見いだす「見立て」の行為である。すなわち知覚心理学における「図（フィギュール）」を偶然の形象に見る行為で、マックス・エルンスト（1891—1976）のフロッタージュ（こすりだし）につながる原体験とも共通している<sup>8</sup>。

近代すなわち19世紀以降の美術は、創造性独創性の呪縛との苦闘を続けてきた。制作には意志が関与し、一度試みられたら、すでに陳腐化する。意識化できるものはすでに達成されているかもしれない。従って、無作為が突破口になると考えられた。つまり偶発性の介入を模索しつつ既存の体制を否定するダダやシュールレアリスムにとって、意味の通用しない不条理が展開する夢の世界は発想源として重要であった<sup>9</sup>。ほぼ同時代に発展したフロイトの精神分析が深層心理を解く鍵を夢に求めた事から、シュールレアリスムは多くを学んだ。なおデカルコマニーは、1921年にロールシャッハの性格テストに導入された<sup>10</sup>。ただしそれ以前から無作為にインクを垂らした形象を使う性格テストは行われていた。

シュールレアリスムは「オートマティズム」すなわち無意識下での制作あるいは執筆を追求し、偶発的な形象を生み出すフロッタージュやデカルコマニーを導入した。しかしデカルコマニーは単独でまとまった作品を作り上げるよりはむしろ、コラージュの素材として作成される傾向が強い。

瀧口修造（1903—1979）は、日本にシュールレアリスムを紹介し、自らもデカルコマニーを用いた作品を制作している。主たる活動は美術評論で、海外の最新情報を紹介し、実験工房など日本の前衛芸術の発展に尽力した。2005年に開催された「瀧口修造夢の漂流物展」（世田谷美術館、富山県立近代美術館）では、瀧口のデカルコマニー作品が多数展示されていた<sup>11</sup>。その多くは万年筆による物で、執

筆に疲れたので試みたという本人のコメントが添えられていた。インクのにじみはさまざまな形象で、執筆の合間に思いつきで行ったとは思えない工夫が見られた。本人が見付け若いアーティストから贈られたさまざまなオブジェはコレクション「漂流物」と名付けられ、それぞれふさわしい形に保管されていた。その全容は、瀧口がキュレーションの人であったことをうかがわせた。

第2次世界大戦後、美術の中心はヨーロッパからアメリカ合衆国に移った。1950年代の抽象表現主義は、アクションペインティングやカラーフィールドペインティングを含んでいた。そこでは絵の具缶を転がし、刷毛を振ってしぶきや垂れ、にじみによる無作為の形象が作品の中核をなした。また彫刻家アレクサンダー・カルダー(1898-1976)は、円などの図形を絵の具で塗り、乾かない状態で画面を立てて絵の具の垂れを作品化した<sup>12</sup>。ロバート・ラウシェンバーグ(1925-2008)はネオダダの代表的な作家であり、絵の具の垂れを表現に取り入れている<sup>13</sup>。

また、フランスのイヴ・クライン(1928-1962)や日本の具体の白髪一雄(1924-2008)は、モデルあるいは自らの身体に絵の具をつけて画面上を転がったりロープにつかまって旋回したりしながら制作する。この場合は「無作為」とは言いがたいが、あらかじめ効果を予測して行動するのではなく、偶発的なハプニングが想定されている<sup>14</sup>。

20世紀美術の流れのなかで、偶発的形象は新しさや独創性への突破口であった。と同時に予測のできない展開をアーティスト自身が楽しんだことも大いに考えられる。それは、第4章で述べるように本研究における稚園児から高校生までのデカルコマニー実践で見られた参加者の表情から推測されるのである。

### 3. 造形教育におけるデカルコマニーの位置づけ

#### (1) 先行発表原稿にみるモダンテクニックとしてのデカルコマニー

造形教育においては、デカルコマニーを含むモダンテクニックの技法は、戦後早い時期から取り入れられ、1950年代後半の美術教育関連雑誌<sup>15</sup>には特集が組まれているほど普及していた。

熊本高工は、「美術教育とモダンテクニック」<sup>16</sup>

の中で、「子どもたちにやらせると、嘘のようにおもしろいものができる。これはいける、こう思った美術教師も数多いと思われる。」と認めていた。

林建造は、「モダンテクニックと幼児」<sup>17</sup>と題して、当時新しい技法として紹介されているモダンテクニックが、すでに保育で普通に用いられていることを示していた。

それらの教育的な意義として「1. 抑圧の解放として、2. 共通性と独自性をもっている点で、3. 造形の基礎としての感覚訓練として、4. 新しい美の発見の場として」を挙げている。林は、当時の美術教育が「抑圧の解放ということが相当重視されている」と述べ、さらにデカルコマニーの例では「どの子もできる。しかもあまり巧拙の差はない。つまり共通性をもっているわけではあるが、できた作品は、誰ひとりとして同じものが作れない独自性をもっている」とし、この技法が、絵に対して興味や関心を抱かない中学生に対しても「救いの神であり、自然主義的な写生などにはない自由さと未知の世界の驚きによって、かえって異常なまでの追求心や関心をもつようになろうというものである」としている。また、「幸か不幸か、モダンテクニックには年令に応じた発展的な体系がない。幼児もおとなも同様にできるし、興味も同じである。多少質が違うだけである」と指摘している。

1990年代からは、幼児教育および障害児教育の分野の発表原稿に見付けることができる。

元幼稚園教諭である松井としは、4歳児に実施してその後見立てをして遊ぶ過程を紹介し、「この活動が日常性を超えて思いがけない、新鮮な驚きと、澄んだ瞳で一人ひとりの子どもに対する機会となっていたことだった」と、幼児教育におけるデカルコマニーの実践を保育の意義として取り上げている<sup>18</sup>。さらにこの技法を取り入れた実践を「入園間もない子どもたちが自信をもって自分を表し、友達を認め合い、幼稚園の活動を切り開いていく過程において、意味のある活動だった」と述べている。

また、障害児教育の分野では、秋山泉らが「養護学校における美術の教材に関する考察」において、この技法が障害のある児童・生徒の表現に対して有効なことを示している<sup>19</sup>。

そこでは、平面デカルコマニーを「ペッタンコ版画」と名付け、知的障害のある児童・生徒を対象に行われた実践が紹介されている。内容は、完成作品

(作家の物か、指導者が作成した物かは記述がない)を見せた後で、生徒がもった感情を述べさせ、制作中は、児童が発する感情表現に耳に傾け、それを肯定して抽象概念を植え付けるというものである。特に自閉的傾向のある児童に対しては、「感情を表出する能力の発達が不十分なので『きれいだね』などの声を掛けて、少しでも感情を理解、あるいは表出できるようにする」<sup>20</sup>などの配慮を行ったことを記している。

これらの発表原稿においては、対象が幼児や障害児であり、いずれもこの技法を使用することによって、表現に対する抵抗を取り除いて意外性を子供に与え、単に表現のおもしろさを感じさせる技法であることを紹介している。

このことは、林がすでに1960年代の初頭に「共通性」と「独自性」としてモダンテクニックの全体に通じる特性を提示し、その使用法を「子どもの生来の欲求に結びつけてこのモダンテクニックを活用するときに、それ本来の意味がいきってくる」と示したことに通じる。

## (2) 造形教育実践書にみるデカルコマニーを用いた題材の紹介

一般的に、デカルコマニーは、教科書に掲載された題材と異なる題材を求める教員向けに編集された造形教育の実践書にも多く紹介されてきた。

1987年(昭和62年)に出版された鑑賞授業の実践書<sup>21</sup>には、「悪魔が見つめている」という題材が掲載されている。この内容は、デカルコマニーを行った後で、ニューギニアの地方の村に伝わる儀式の際に被るお面を鑑賞させて、子供にもそのお面から影響を受けた「悪魔の顔」を描かせるものである。その際に「造形的に恐ろしい顔」が、「絵の具の混色や重色がつくり出す色や形状」により、「目、鼻、口の具体的な形」を容易に見つけ出すことができるとして、積極的に見立てさせて制作につなげる内容である。

1994年(平成6年)に主として幼稚園児や小学校低学年児童の指導を対象にした内容のものが出版されている。そこでは、「3歳児から楽しめる技法」の項に、この技法が紹介してあり、その特性として「偶然にでき上がった形のおもしろさや、それをいろいろなものに見立てる楽しさがある」とし、「できた形が何に見えるか話し合ったり、できた形にペンで描き加えてさらに楽しい活動にすることができ

る」と述べられている。ここでも、デカルコマニーが容易に見立てと結びつくことを示している。ちなみに、この技法紹介のページには、作品例として前出のマックス・エルンストの作品が掲載してある。

2002年(平成14年)に出版された主として幼稚園児や小学校低学年児童の指導を対象にした技法書<sup>23</sup>には、「いろいろ虫」という題材が紹介してある。そこでは、最初から画用紙を折って、蝶のような左右対称の昆虫の形を切り取り、その片面に絵の具をつけてデカルコマニーをしながらその虫の模様をつくるという内容が示されている。この場合、左右対称の形をそのまま蝶の羽に見立てることを前提にしている。

以上のように、これらの実践書ではデカルコマニーを、子供が見立てをするためのきっかけとして紹介していることが分かる。

## (3) 図画工作科および美術科の教科書におけるデカルコマニーを用いた題材の紹介

### ①小学校の図画工作科教科書による掲載内容から

2011年度(平成23年度)から2014年度(26年度)にわたって使用された小学校の図画工作科の教科書は、日本文教出版、開隆堂出版、東京書籍の3社から出版されており、それぞれの教科書において、モダンテクニックにおけるデカルコマニーの紹介がある。

日本文教出版では、1・2年下の巻末の「つかってみようざいりょうとようぐ」のページにおいて他にパス、コンテ、クレヨン等の描画材料を用いたスクラッチ、バチック、ステンシル、スタンピング等のモダンテクニックの中の1つとして取り上げられている。ここでは、いずれも小学校低学年の児童に馴染みのある文章表現とイラストでそれぞれの技法を紹介し、「かたちをうつしてみよう」とこの技法<sup>24</sup>を紹介している。

絵に表す内容の題材において、これらの技法を用いて作品を完成させた作品が他学年においても掲載されている。例えば3・4年下の「すてきなペーパーショップ」<sup>25</sup>という題材は、デカルコマニーを含むモダンテクニックを用いて紙を加工した後に、それらの紙を交換しながら、集めた紙を用いて新たな表現を行うという内容である。

開隆堂出版では、1・2年下に「絵の具で遊んで『自分いろがみ』」という題材が掲載してある。スパッタリングや絵の具をビー玉につけて紙の上で転がし



て描く技法、スポンジで段ボール紙を刷毛代わりにして絵の具を伸ばして描く技法、吹き流しやドリッピングと合わせて、これらの技法で作成した「自分いろがみ」をたくさんつかって、主人公をコラージュで作成するという絵に表す活動の内容である。参考作品として児童作品の他に、エリック・カールの「はらぺこあおむし」が掲載されており、「カールさんは、半とうめいのうす紙に、いろいろな方法を使って、『自分のいろがみ』をつくります」<sup>26</sup>とキャプションが添えられている。

東京書籍では、3・4年教科書に「絵の具で遊ぼう<sup>27</sup>」という題材でその紹介がある。絵の具のいろいろな使い方を試して、思いついた形や好きな色で表す内容であり、その他のやり方としてドリッピング、スパッタリングに加えて合わせ絵として、デカルコマニーを紹介している。参考作品は児童の作品のみである。

## ②中学校の美術科教科書における掲載内容から

2012年度（平成24年度）から2015年（平成27年度）にわたって使用されている中学校美術科教科書である、日本文教出版、開隆堂出版、光村図書の3社の内容を確認したところ、光村図書を除く2社の教科書で、デカルコマニーを含むモダンテクニックの掲載が見られる。

日本文教出版では、1年生用の教科書に「いろいろな技法を用いて」<sup>28</sup>というページにドリッピング、コラージュ、ストリング、スパッタリング、マーブリング等のモダンテクニックの紹介と合わせてデカルコマニーを紹介している。参考作品として、いろいろな技法を合わせて作った色面をコラージュした生徒作品と共に、主にドリッピングの技法を用いて表現されたサム・フランシスの「ブルーの上にレッド」が掲載されている。

開隆堂出版も1年生用の教科書で「広がる形や色技法の発見から表現へ」<sup>29</sup> スパッタリング、ドリッピング、マーブリング、フロッターージュ、コラージュと共にデカルコマニーを紹介している。生徒作品と共に、白髪一雄の「天女の舞」が掲載されている。

## ③デカルコマニーが教科書に掲載される意味

教科書は、当然のことながら、学習指導要領に準拠した内容であり、文部科学省の検定に合格したものである。

現行の小学校の本文及び解説<sup>30</sup>には、デカルコマニーを含むモダンテクニックについて特に言及され

てはいない。しかし、前述のように教科書にはその内容について全会社で掲載してある。

中学校の内容<sup>31</sup>については、A表現(3)のイ「材料や用具、表現方法の特性などから制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって表現すること」の解説の箇所において、モダンテクニックを用いて偶然にできた形や色をどのように活かすのかについて、「見通しをもって作り上げていく学習過程を重視する必要がある」と示されている。

教科書に掲載されたデカルコマニーを含むモダンテクニックは、いずれも絵画表現の広がりやを促す内容であり、単に水彩絵の具を用いて筆で着色をするという技法からの脱却を勧めていると受け取ることができる。また、全てではないが、作家の作品が参考作品として掲載されている点からも、多様な美術の世界における技法の一部であるという事実を児童生徒に紹介する役目も果たしていると言えよう。

## 4. 各校種におけるデカルコマニーをきっかけにした題材の展開

本章では、本研究グループが平成25年度から実施している富山大学人間発達科学部附属幼稚園・小学校・中学校および富山高等専門学校におけるデカルコマニーの実践を元に展開した事例について述べたい。

### (1) 幼稚園における実践

幼稚園では年中児を対象にし、次のような実践を行った<sup>32</sup>。

まず、教師がケント紙に絵の具を乗せ、その紙を折ってこすり、広げるまでをやって見せた。その後、3～4人のグループごとに机に座り、二人で1セットの絵の具を使えるようにして、活動を行った。

#### ①絵の具が垂れてもその特性には興味をもたず、面塗りを続けるA児



A児は、一度にすくう絵の具の量が多いため、スプーンから紙の上に絵の具が垂れて、「投下」の状態になっていた。しかし、その現象に興味をもつ様子はなく、垂れた部分にスプーンをつけて丸く広げる。その後も色を変えては、丸く絵の具を広げ、「面」のように塗ることを繰り返し楽しんでいった。

## ②垂れる絵の具の面白さに気付くが、思うように再現できないB児



B児は、皿から絵の具をすくったときに絵の具が垂れる様子に興味をもったようだった。スプーンを紙につけずに浮かせ、上に乗った絵の具を「投下」させようとするが、量が少なくなかなか落ちない。何度かスプーンを振るものの落ちる気配はなく、あきらめたようにスプーンを紙につけて色をつける。スプーンをリズムカルに紙に置く「点々」なら容易に色をつけられることに気付くと、その後は他の色でも「点々」を繰り返した。

## ③作品が仕上がると急に饒舌になったC児



C児は、絵の具を乗せる間はあまり言葉を発さずに活動していた。しかし紙を折り曲げてこすり、広げた作品を見ると、興奮した様子で「見て」「見て」と隣の友達のをたたき、アピールする。相手から反応はあまりないが、「水玉模様になった」と嬉しそうにしている。

A児の姿に象徴されるように、4歳児は自分の興味をもった行為を繰り返す様子が多く見られた。また、「面」塗りを繰り返すA児と同じ机で活動している二人が、それぞれ「投下」と「曲線」を繰り返したことから分かるように、同じグループの友達の影響を受けている様子もない。他の班でも友達のやり方を見て真似るという様子はほとんどなく、自分自身が絵の具という素材と向き合い、できるといった方法で色をつける姿が見られた。

次に、B児のように「投下させようとするができない」、「絵の具を広く塗り広げたくてスプーンを大きく動かすが塗れない」という、意図した通りに色をつけられない様子も見られた。絵の具の原液とスプーンという素材と道具が4歳児の発達段階に適していたかという振り返りが必要である一方で、やりたい思いがあってもそれを実行できない技術の未発達さが見えた。

最後に、C児の様子に表れているように、紙を折ってこすることによって、自分が置いた絵の具の形が変わったり、左右両面に色が広がったりすることで驚きや喜びが生まれることが分かる。発達段階上、園児同士のやりとりは活発ではないが、多くが、紙を広げた瞬間、「うわー」と声をあげたり、誰かに見せたくてきょろきょろしたりしていた。

## (2) 小学校における実践

### ①各学年での実践の様子と考察

小学校では、1年生<sup>33</sup>・3年生<sup>34</sup>・6年生<sup>35</sup>のように、低・中・高学年で実践を行った。

小学校では、手の動きの発達に合わせて、描画行為の幅が広がっている。それによって、描画行為から受ける感覚を味わう段階から、描画行為によって生まれる色や模様を楽しむ段階へ変化している。

また、互いの取組や作品に対する関心が、学年があがるにつれて高まっている。表現の始まりでは、自分で描画行為や色を選んでどんどん試している子供がいる一方で、その様子を観察して自分の表現に取り入れようとする子供や、描画行為の効果確かめから始めようとする子供などがある。表現の終末では、デカルコマニーによる偶発的な表現を喜んだり、驚いたりしながら、感じた気持ちを友達と交流しようとしている。

### ②デカルコマニーをきっかけにした題材の展開

デカルコマニーでの偶発的な表現は、意図しない色の広がりや重なり、模様をつくり出す。また、絵



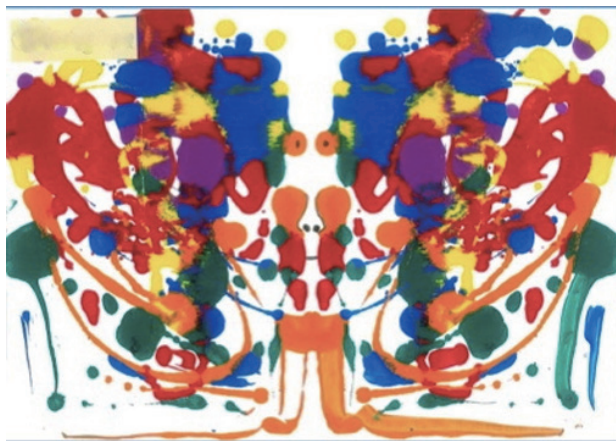
学年	実践の様子	描画行為に関する考察	他者との関わりに関する考察（鑑賞）
低学年 1年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>「直線」「置く（点）」「点々」「こすりつけ」が多い。</li> <li>文字等、表現内容が様々である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙に直接スプーンを触れさせて描画する傾向にある。</li> <li>色よりは描画によって生まれる線や点、面を楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の描画行為に没頭し、友達に意識が向かない。</li> <li>出来上がった時には、教師に作品を見せる。</li> </ul>
中学年 3年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>「投下」「投下線」が多い。下学年に比べて手首の動きが柔軟になった。</li> <li>気に入った描画行為を何度も繰り返す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵の具をすくう量を加減して、垂らし方をコントロールしている姿が見られる。腕の動きが発達し、紙に直接スプーンを触れさせない描画を楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いの取組に関心をもつが、影響をあまり受けない。</li> <li>出来上がった後、教師や友達に作品を見せる。</li> </ul>
高学年 6年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>「投下」「投下線」「直線」「点々」が多く、手の動きが滑らかになった。</li> <li>描画行為の数が増え、様々な方法を試す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手の動きに応じて、描画行為にリズム感が感じられるようになった。どの描画行為も簡単に行うことができ、楽しむ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いの取組や作品に関心をもち、発想の刺激や出来映えに影響を受けている。</li> <li>グループ内で友達の様子を見て描き始めたり、互いの完成作品を見せ合ったりする。</li> </ul>

の具の量が多ければ、色が複雑に混ざり合い、より一層多様な表現を生み出す。そうした意外性を存分に味わった児童たちに、出来上がった作品を基に発想を膨らませる題材に取り組ませた。

小学校6年生では「不思議な形と色から…～デカルコマニーを生かして～」として実践した。

出来上がったデカルコマニーの模様や色を、様々な方向から眺めたり、グループの友達と見せ合って何に見えるかを考えたりする時間を設定した。すると、形や色を何かに見立てたり、物語や空間等を想像したりする子供たちが出てきた。そこで、授業ではそうした意見を話し合って、デカルコマニーの模様や色から、様々な表現の主題が生まれることを整理した。その上で、カラーマーカーや色鉛筆、クレヨン等を使って、形や色から思い付いたことを表現しようと投げかけ、1枚の作品に仕上げた。

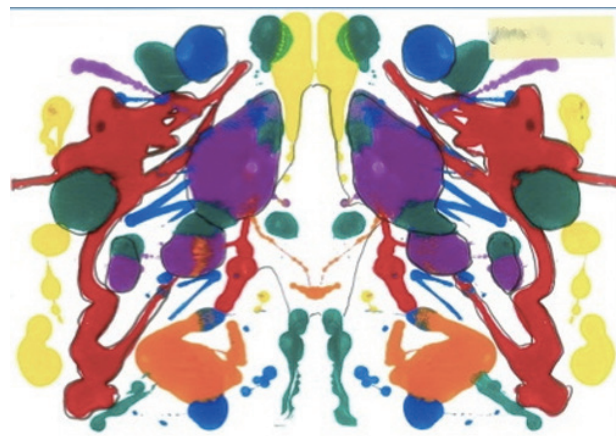
#### A 児の作品 「大爆発」



絵の具の置き方を「点々」「投下線」を中心に行ったA児は、一旦綴じた紙を開いた瞬間、色の重なりや線の美しさに驚き、顔を輝かせていた。

出来上がった模様は、色の点が飛び散っているように見えたり、中心から斜め上に伸びる線が弧を描いたりしている特徴があった。そうした激しさや空間の広がりを生かしながら、新たに目鼻を書き加えて、自分自身の心象を重ねて完成させた。

#### B 児の作品 「未来へ」



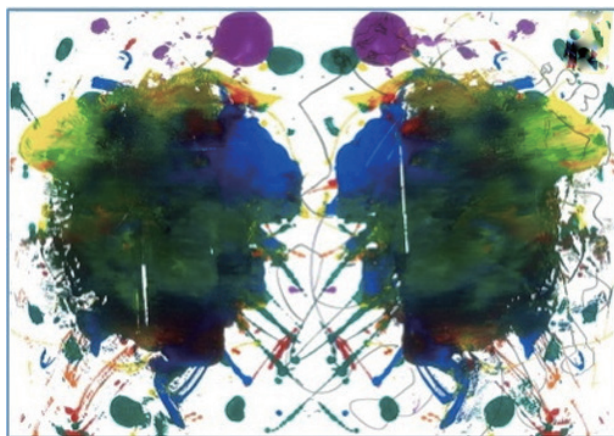
B児は、一つ一つの色を多めに「投下」「投下線」でたらし込み、描画行為数は少なかった。

出来上がった模様は、白地が多いが、その中心部に緑やオレンジ色の顔のようなものが浮き出て見えるものになった。B児は、赤色や青色の模様や線から上や奥に吸い込まれるイメージを抱きながら、紫や黄色との組合せから神秘的なものを感じていた。

C児もたっぷりと色を「投下」してこすると、混色することに気づき、黄色と青と緑の組合せを試した。

色の混色によって、青緑や紺のように深みのある色ができたことから、C児は「宇宙」をイメージした。紫色の部分を地球として描き込んだ。白い部分には「投下線」による細い曲線があることを生かし、

### C 児の作品 「宇宙の反乱」



単なる「宇宙」ではなく、動きのあるものへとイメージを膨らませた。

児童たちは、できた模様や形だけでなく、白い余白部分との組合せから、自分なりの表現の主題を見付けた。そのため、本題材では余白部分に描き足している者が多かった。児童たちは、前時の描画行為での驚きや感動を生かして表現を始めるだけでなく、画面全体を客観的に捉え直して、イメージの変化やイメージの広がりを楽しみながら作品を完成させた。

#### （３）中学校における実践

中学校では、１年生の美術科の授業において実施<sup>36</sup>している。

自分の気持ちや考えていることを絵と詩に表す題材において、デカルコマニーを含むモダンテクニックを用いて作成した紙をコラージュして絵に表し、またそこに詩を添えて作品とするものである。初めはコラージュして絵を作ることや詩とともに作品に表すことは伝えず、コラージュを除くモダンテクニックを体験し、純粹に形や色を楽しむことを目的として行った。事前のアンケートでは絵を描くことに抵抗感のある生徒も授業では積極的に取り組む様子が見られた。体験させたモダンテクニックはデカルコマニー以外にマブリングやドリッピング、フロタージュ、スパッタリング、ストリングなどである。デカルコマニーにおいては、出来上がる模様が意図しない形や色になりその面白さに喜んだり、そこからある形に見立てたりと、形や色に楽しんでいる姿が見られた。

次にモダンテクニックを用いて作成した紙をコラージュして自分の気持ちや考えていることを絵に表すこととした。事前にコラージュや絵と詩で表すことを伝えず制作に入ったため、作成した紙の模様を見

て感じたことを基に表す内容を考えたり、自分の思いにあわせて紙の組み合わせ方や切り方、添える詩について考えたりするなど、作り上げた作品は相互鑑賞し、それぞれの作品のよさや美しさを味わった後、そのよさや美しさを紹介する文を書き、全体の場で紹介し合った。

#### （４）高等学校における実践

高等学校における実践<sup>37</sup>としては、他校種と同様の方法に加え、約１ヶ月後に行われる高専祭における展示作品を作るという要請に応えるため、A3版ケント紙を用いて１枚に絵の具を乗せ、その上からもう一枚のケント紙を押し付けて移動する（ずらす）方法で表現する形の制作も行った。この方法で制作した作品はその後コラージュの背景に使用した。

４名から５名で一つの班をつくり、共同絵の具を用い、スプーンですくった絵の具を描画、彩色に用いるという方法、さらに道具なども同じものを用いたが、実際には、体格的に大人に近いことから、相対的に道具の扱いは簡単になったと考えることができる。画材についての知識も安定しているが、観察からは、絵の具の色によって粘性が異なることを理解する時間が多少かかったように判断できる。

教室は、一般の教室や美術室ではなく、オープンラボという広めの多目的スペースを使用している。そのため配置的に隣の班とのコミュニケーションが頻繁に取れるほどには近すぎず、主に班内でのコミュニケーションが活発だった。

一部の生徒は、デカルコマニーを経験済みだったが、大部分の生徒は、デカルコマニーという名前と実際の技法内容が知識として対応しておらず、説明を聞いていくうちに、各自の記憶のなかにあるものから想起されたと考えられる。説明後に理解ができていない生徒は表面的には見受けられなかったこと、また実際の制作の記録の確認から、年齢的に技法的・知識的な難しさはほとんどないと判断した。

周りを見てから行動を起こしたり、周りに影響を受けたりしながら行動を起こすのは高等学校においても特徴的である。評価者の判断が一樣ではないことも考慮に入れても、一人一人というよりも班ごとに技法の傾向に偏りが発生している。技法的に困難さが無いにもかかわらず周りの影響を受けるという制作過程は、このように分析結果からも裏付けられる。



## 5. 描画行為におけるデカルコマニーの取組の変化

### (1) 技法について

発生した技法行為の出現数をビデオ映像からカウントした。それらを相対的に比較することを目的として期待度数との比較を行い、その割合をまとめたものが表1である。これを見ると、幼児と小学校1年生は多寡の双方において、技法の出現が偏っている傾向が見られる。小学校3年生、6年生には全ての技法に対して相対的にバランスのとれた出現数となり期待度数と近似するものが多くなる。中学校1年生、高校1年生においては、それまでの筋力的、知識経験的な要因とは考え難い偏りが発生してくることが考えられる。

表1：技法の出現数と期待度数との比較（％）

	幼児	小1	小3	小6	中1	高1
直線	38.75%	220.63%	58.95%	92.85%	57.01%	124.49%
曲線	148.56%	82.38%	88.78%	96.40%	138.03%	73.04%
置く（点）	46.22%	175.74%	38.74%	133.48%	50.61%	136.34%
点々	153.73%	108.20%	57.82%	115.55%	59.74%	125.59%
こすりつけ	83.26%	134.14%	102.85%	98.43%	51.91%	118.94%
面	276.98%	150.79%	90.28%	22.62%	105.28%	59.42%
投下	55.43%	12.30%	164.43%	79.69%	131.34%	126.46%
投下線	77.68%	2.15%	156.67%	122.14%	191.71%	24.82%

凡例 ■ ≥160% ■ ≥120%  
■ ≤80% ■ ≤40%

幼児から小学校1年生までは、技法的な部分で困難が見られる。幼児ではとくに、筋力的な問題も影響していると考えられるが、絵の具などの画材に対する知識が経験的に身につけていないことなどが影響していると考えられる。さらに幼児においては、総合した結果は面に特化している以外は多様な技法が出現しているように見えるが、実際には個人ごとに偏った技法の出現が見られる。それらが技法的・筋力的に克服された小学校3年生、6年生においては、ほぼ全ての技法が出現し、中学生、高校生では、別の要因によって技法の偏りが発生していると考えられる。

また、様々な技法を試す傾向、あるいは逆にほとんど同じ技法のみで制作する傾向といった技法に対するバリエーションの傾向については、校種間の違いよりも個人の違いが影響していると考えられる。自由に制作させる場合は当然発生しうる問題であり、知識として技法を理解できる発達段階においては、

適切に助言やサポートを行うことで、児童生徒個人の中にある創造性を引き出すことが可能になるだろう。

### (2) 周囲との関係性について

共同絵の具を使用した授業ということで必然的に自分のまわりの人々から影響を受けることが推測されたが、幼児の場合、実際には周囲との関係よりも対教師という限られた人間関係において成果を強調する（先生に見てもらいたがる）傾向が見られた。制作自体は個人の作業に徹している様子が顕著である。

それに対して小学生は教師に加えて、周りに見せようとする場面が徐々に増え、個人から集団への意識が制作態度などにも反映されるようになる。

中学生、高校生は、周りを見てから制作を開始する生徒が目立つようになり、制作したものについても、教師に積極的に見せることは少なく、周囲の友人などに見せる傾向が顕著である。その結果が出現する技法の偏りにも関係していると考えられる。

高校生については班の外側にいる生徒より、同じ班内の周りの生徒の制作の様子に影響を受ける場合があり、班ごとに偏った技法が出現する傾向が見られたが、これが制作環境によるものかどうかは明確にならなかった。

デカルコマニーのような無作為に近い技法を用いてもなお周囲を気にするという状況は、ローウェンフェルドが述べるところの「思春期の危機」<sup>38</sup>にまさに直面していると受け止めることができるかも知れない。彼が示す「無意識な子どもらしい方法も意識的な方法ももたないこの時期」であるからこそ、いくらこのような技法を示したとしても、他人との違いをどうしても意識して表現を行おうとしてしまうようである。したがって、なおのこと、「子供の自信喪失を防止する刺激の手段と方法を導入する」ために、デカルコマニーをはじめとしたモダンテクニックの提示は、中学生や高校生に有効であると言えないだろうか。

## 6. おわりに

「ここでは、学校の図画工作と違って、自由に表現できるのがよい」。これは本年度、富山県立近代美術館で、月に一度開催されている子供向けのワークショップ<sup>39</sup>に我が子を連れてきた母親の言葉であ

る。当日は、デカルコマニー、ドロッピング、スクラッチの3種類のモダンテクニックを体験した後、美術館の所蔵作品でこれらの技法が用いられた作品を鑑賞するという内容のプログラムであった。学校の授業と比較した母親の発言は、不自由な内容の授業が学校では行われているとも捉えかねられないものである。

造形教育においては発達に応じた自己評価が求められる。技法の習得の未熟さを意識できる段階になると、他者との技法の習熟格差によって萎縮する場合もあるだろう。本当は「見る力」が育っている事が評価できるのだが、そのような指導はわずかであろう。デカルコマニーは、用紙を開いたら絵の具を配置した状態とは図形が変わる。幼稚園児は絵の具を置く作業に熱中する。小学生は思い通りにならないから、逆にのびのびと効果を楽しむ。複雑な動きができるようになると、さまざまな方法を試す。中学生はある程度効果を予測して作成し、手法を理解していることがわかる。高校生は、すでに美術が嫌いであると意識した者もいる集団であるが、子供返りしたかのように実践を楽しむことのできる者もいる。

デカルコマニーは、作為を封印する手法で、偶発性が大きく、技能によらない描画である。従って美術嫌いに福音をもたらすかもしれない。しかし中学生以上になると、効果を予測した技法を編み出し、あらかじめ描きたい形象を意図して配色する生徒が増えていった。アートとテクノロジーはかくも密接なのだ。

この事実を自分の教え子に指導を行う教師が認識して造形教育の中に取り入れていくことで、造形表現の広がり期待させ、単に絵を描くことを実物の通りに正確に模写を行うことのみとして捉え、美術を嫌いな子供をつくらないことにかかっているのではないか。

## 註)

- 1 『唐代名画記』の王墨、『歴代名画記』の王默などによる澆の手法。張彦（長廣敏雄訳）、『歴代名画記』（東洋文庫305）、平凡社、1977年、pp.309-311
- 2 田中一松、中村溪男、『雪舟・雪村』（水墨美術大系7）、講談社、1973年、pp.44-47、175、図1、

26

- 3 飯島勇、鈴木進、『大雅・蕪村』（水墨美術大系12）、講談社、1973年；小林忠、『江戸絵画史論』、瑠璃書房、1983年、pp.184-204
- 4 俵屋宗達筆、『蓮池水金図』（17世紀初頭、京都国立博物館）。山根有三、『光悦・宗達・光琳』（水墨美術大系10）、講談社、1975年、pp.146-147。図4、5
- 5 木下政雄、『三十六人家集』（日本の美術168）、至文堂、1980年
- 6 レオナルド・ダ・ヴィンチ、『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記上』、岩波文庫、1977年、pp.251-252
- 7 前掲書、p.213；石川千佳子、「文人画論に見る観賞の構造」、『宮崎大学教育学部紀要』76、19954年、pp.1-6、esp. 4-5。
- 8 幼い頃、寝室の天上板の木目に様々な形を見いだして空想にふけた。村上博哉、「マックス・エルンスト」、『ダダ・シュルレアリスム』（世界美術大全集27）、小学館、1996年、pp.165-176、esp. 1773-176
- 9 H. H. アーナスン、ダニエル・ウィーラー改訂増補、上田高弘 他 訳）、『現代美術の歴史：絵画彫刻建築写真』、美術出版社、1995年、pp.249-302
- 10 『心理学事典、平凡社』、1981年、pp.838-840
- 11 『瀧口修造 夢の漂流物』、世田谷美術館・富山県立近代美術館、2005年、pp.44、46、136-141；光田由里、「ある疑問符—瀧口修造の『造形的実験』」、『夢の漂流物』、pp.244-251；杉野秀樹、「謎を残したままの『夢の漂流物』—富山県立近代美術館の瀧口修造コレクション」、『夢の漂流物』、pp.277-285
- 12 『現代美術の歴史』、pp.387-414；『アレクサンダー・カルダー展 Motion & Color』、富山県立近代美術館他、2000年、pp.140-143
- 13 『現代美術』、pp.448-483：Thomas Crow, The Long March of Pop: Art, Music, and Design, 1930-1995, Yale U.P. 2015年, chap.3.
- 14 『現代美術』、pp.471-481,
- 15 山口正城「モダン・テクニックとは何か—特集・モダン・テクニック」『形24号』日本文教出版、1958年、p.4-10
- 16 熊本高工「美術教育とモダン・テクニック」

- 『形』24巻, 1958年, pp.40-43 日本文教出版
- 17 林建造「モダンテクニックと幼児」『幼児の教育 Vol.60 no.6』日本幼稚園協会, 1961年, p.18-21
- 18 松井とし「子どもたちへのまなざし(4):デカルコマニー」『幼児の教育 Vol.92 no.8』日本幼稚園協会, 1993年, p.52-53
- 19 秋山泉・福田隆眞・宮崎龍次・石川昭枝・島田憲貢・玉川香寿美「養護学校における美術の教材に関する考察(2)」『山口大学 教育実践総合センター研究紀要』1990年, p.87-104
- 20 宮崎龍次「平版デカルコマニー 発達の差の大きいクラスにおける, 同一題材による動機づけのために」秋山泉・福田隆眞・宮崎龍次・石川昭枝・島田憲貢・玉川香寿美「養護学校における美術の教材に関する考察(2)」『山口大学 教育実践総合センター研究紀要』1990年, p.87-90
- 21 東京都図画工作研究会鑑賞教育研究会編著「子どもの美の領土へ 新しい鑑賞授業の実践」日本文教出版, 1987年, pp.55-57
- 22 福田隆眞編著「子どもと教師のための造形技法-平面-」建帛社, 1994年, pp.16-17
- 23 栗山誠「描画を楽しむ教材と実践の工夫」明治図書, 2002年, pp.40-41
- 24 日本児童美術研究会「ずがこうさく1・2上」日本文教出版, 2011年, pp.40-41
- 25 日本児童美術研究会「図画工作3・4下」日本文教出版, 2011年, pp.6-7
- 26 日本造形教育研究会「図画工作3・4下」開隆堂出版, 2011年, pp.8-9
- 27 栗田真司・大道博敏・辻克巳・庖刀由利子「新しい図工3・4」東京書籍, 2011年, pp.5-6
- 28 春日明夫, 長田謙一, 大橋功, 小泉薫, 小澤基弘, 泉谷淑夫「美術1 美術との出会い」日本文教出版, 2011年, p.45
- 29 日本造形教育研究会「美術1」開隆堂出版, 2012年, p.12
- 30 文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」, 2008年
- 31 文部科学省「中学校学習指導要領 美術編」, 2008年, pp.62-63
- 32 年中児「デカルコマニー実践」(於:富山大学人間発達科学部附属幼稚園ばらぐみ教室) 2013年11月13日
- 33 小学校1年生「デカルコマニー実践」(於:富山大学人間発達科学部附属小学校図工室) 2013年7月2日
- 34 小学校3年生「デカルコマニー実践」8:40~9:25 ((於:富山大学人間発達科学部附属小学校理科室) 2014年10月20日
- 35 小学校6年生「デカルコマニー実践」(於:富山大学人間発達科学部附属小学校 図工室) 2014年7月14日
- 36 中学校1年生「デカルコマニー実践」(於:富山大学人間発達科学部附属中学校 美術教室) 2013年11月25日
- 37 高等学校1年生「デカルコマニー実践」(於:富山高等専門学校) 2014年10月14日
- 38 V・ローウェンフェルド著, 竹内清・堀之内敏・武井勝雄共訳「美術による人間形成-創造的発達と精神的成長-」, 黎明書房, 1963年, pp.327
- 39 富山大学人間発達科学部子どもとのふれあい体験・美術館における鑑賞ワークショップ「とみだいペケペケ☆アートショップ」2015年8月4日
- (2015年10月19日受付)
- (2015年12月9日受理)